

現任教育の立場から

伊地知 淑子（東京女子医科大学東医療センター）

昭和50年代、私は大阪で看護を学びました。本院の院内教育はとても充実しているからと教務に進められたのでした。私は当時より「おちこぼれ」意識が強く、自他共に認める勉強嫌いでした。院内教育でまず出会ったのは、B4大の用紙に印字された「スコープ」と呼ばれた「自己啓発」を示す院内教育の全体像でした。「自分の力は自分で磨いていく」ということをおぼろげながら意識できた瞬間でした。あれから四半世紀あまりの私の歩みはその時に受けた院内教育がずっと私を支えてきたように思います。

卒後3ヶ月研修を受けたときです。看護部長が黒板に「補完」と2文字を書かれ「これが看護です」と言われました。そしてチームナーシングとは、今、目の前にいる患者の状態により、リーダーを中心にチームメンバー全員で「機能別看護」や「受け持ち制」を自由に取り入れチーム全体で責任を持つことだと教わりました。

入職3ヶ月目でバーンアウト寸前の私が、もう一度看護に挑戦してみようと動機付けされたのは、その時のグループに入っていたいただいた教育委員の方の「あなたにはちゃんと看護観があるじゃない」の一言でした。かくしてネガティブな私の看護生活は場所を変え対象が変わっても今までなんとかやってくることができました。

私にとっての「看護のこころ」は東京女子医科大学病院で培われたと思っています。ですから「拓こう・磨こう・伝えよう 看護のこころ」は、時代の流れとともに看護のこころを私に教えてくれた当院に脈々と流れている至誠と愛の精神だと思います。

本院の教育病棟で過ごした卒後7年間は、さまざまな取り組みを試みた波乱万丈な教育担当者時代です。その後「旧附属第二病院」に移り、対象も患者をケアする看護師の育成と場も現任教育と変わりました。今、本院で受けた院内教育の影響がしっかり大きな支えになっています。また昭和50年台当時、看護専門学校や短期大学の先生方が教務の傍ら臨床の場に入られ看護婦の指導をして下さいました。臨床の場では「看護のロールモデルになろう」という空気で活気に満ちていたことを覚えています。チームナーシングが導入されたばかりのときで、失敗があると全てリーダーの責任となった時もありました。お互いが仕組みをよくわかっていなかったのです。だからこそ集合教育の必要性を感じた諸先輩は学校と一丸となって現任教育に取り組んだのだと思います。その時に体験学習に出会い、自分を見つめる学習が始まりました。日々振り返り、何を振り返ったらいいのかもわからず振り返り、できない自分を認められず辛かった。日々の看護の振り返りに慣れてくると今度は「後手の看護」に気づき、「どうして先手の看護ができないんだろう」ともがいていました。

そんな私の目で、肌で、感じている東医療センターの看護の息吹をお伝えします。東京都東北部の地域に根ざした中核的病院であり、平成15年4月より東京都災害拠点病院になりました。また平成17年9月から東京DMAT指定病院になりました。総合救急診療部を含め18診療科があり、歯科口腔外科および田端駅前クリニックのサテライトが隣接しています。病床数は478床、全職員数役1000名です。

看護部は、患者の療養生活を支えるのは、466名の看護職員、20名の主任、14名の師長です。在宅療養支援と感染管理の2名のエキスパートがサイドからスタッフ支援をおこなっています。在宅療

養支援のエキスパートは褥瘡対策チームの一員でもあり栄養士や医師とともにセンター内をラウンドしています。

全体を総括する鎌倉看護部長は患者支援担当の副院長も兼務しています。そして部長を支える女房役は、総務、業務、教育を一手に引き受けている立石看護副部長です。以上概ね当センターの看護部の人的環境です。

そしてチーム体制は、チームナーシング中心です。当センターの看護理念は、大学の理念「至誠と愛」を基盤とし、「医療機関にふさわしい人間性と能力を身に付け、患者ひとりひとりの生き方を尊重し、創造性豊かな看護の提供」です。オレムの看護論をもとに患者のセルフケア不足への援助をめざし、自分たちの看護不足も自分で開発していけることを支援しあっていきたいと考えています。日常のケアは、フォーカスチャージング®方式で記録します。看護の基礎を学んできた方なら誰でも書けるという利点があります。資格を持つ看護師、助産師が行うシンキングアクションもドゥーイングアクションも同時にその場で自分のレベルで観察したこととその時判断した事実をフォーカスして記録できることも現場向きです。地域に密着型の医療をめざし施設の充実だけでなく、ソフトの充実もめざしています。

<「自分づくり」と「自分づくりの場の提供」>

当センターの現任教育は体験学習のステップを自ら進めていけることに重点をおいています。「自分」の「気づき」をもとに「行動変容」ができるための内発的動機付けが湧き上がることが教育の成果だと思っています。「やってみたい!!」と思うことを引き出すことです。

患者と1対1の看護の本番で、看護師ひとりひとりの提供する看護が、患者からの「ああ気持ちいい」「安心していられる」という療養生活の空間や時間を過ごすことができればそがきっと「看護になった」ということだと思います。学んだ基礎を知恵に変える体験ができることです。そのことを常に「今より患者にとって良い」をめざしてその時その時に対応できる看護師をめざしていきたいと思えます。院内教育の場の提供をする教育委員同士また受講生が体験学習を追体験する場である看護単位でかわりあうお互いが共に成長できるような考え方や方法を模索し続けたいと思えます。

そこで当センターの院内教育は看護師が各々の立場や役割を果たすための「自分づくり」であり、お互いが気づけるための教材になりあう場を以下に提供していくかがとても重要課題です。

1つ1つがばらばらで断片的ではなく、1つ1つ積み上げる事で自分を創っていくことを大事にしたいのです。階段の節目では必ず「心構え」という自分の行うことを受け入れる準備をする必要があります。「看護実践」で自己流にならないように理論を使って「自分の対象の見つめ方」の基盤をしっかりつかんで欲しいと思えます。「記録」することは自分の看護を「文字で表すこと」で「情報の整理や分析」そして「統合力」を養う事につながると思えます。

「自分」と「他人」との価値観の違いに気づくことでお互いを尊重し合える関係づくりの始まりです。チームのメンバーになるためには、「チーム活動する上での問題は自分たちで解決していける」という行動力と感性を身に付けたいと思えます。それらのことを踏まえながら、チームの目標を達成するために自分はどんな風にリーダーとして、発言したり行動したり態度をとっているのかを見つめ、チームメンバーはどんな思いをしながら動いているのかに気持ちをさせられる事ができるようになって欲しいと思えます。そしてリーダーとして最終段階では、チームがより良い看護が行えているのか、そのためにチームがどう変化したらいのかという看護のビジョンが持てるように、実際にチームに介入をしていくことで自分の役割意識を育てて言って欲しいと思えます。

<看護の知と技と心のみがく術と業>

基礎で学んだ知識や技術を現場の動きや瞬時々の観察と判断を体験することで、自分の看護の術を磨いていきます。自分の役割と仕事を理解することや成し遂げることの中で磨かれるということを知って欲しいと願っています。

<めざすは「よりよい看護」ing 大切なのは「今」と向き合う自分>

今、自分の目の前の患者の問題に向き合える自分になることをめざしたい。常に今を大切にしたいと思う。「学生から社会人になる自分」「仕事を時間内で遂行する自分」「時間内に看護の目標を達成するチームメンバーとしての自分」「自分も含めメンバーとともに人が看護できるように関わるチームリーダーとしての自分」「患者に対するスタッフやチームに対する自分に向き合う主任としての自分」「患者と向き合えるスタッフを支えることに向き合う師長としての自分」などお互いの間で起こる「齟齬」を解いて分かり合える関係に育っていきたいと思います。

<役割の変わり目では、いつも「新人」になる>

成長は新人時代を乗り越える時にあると思います。新人看護師だけが新人ではないと思います。役割の変わり目は皆新人だと私は思います。新しいことに挑戦する時はみな不安と脅威の中にいると思います。自己流からプロに近づいていく過程に「新人」はいつもいるのだと思います。

<「人のせい」から抜け出したら自己開発の始まり>


そして辛い時は自分以外の誰かのせいにしたくなります。そうしているうちはまだ自分が見えません。「指示待ち症候群」はそんな時とっても楽なのです。しかし脱出しないといけません。「やってもみない前の評論家ジンドローム」からも脱出しないといけません。自分の方に目が向いたら成長の始まりだと思います。

<手作りの中にエビデンス>

自分たちの体験を大切に「胃の中の蛙」にならないようにアンテナを高くしていきたいです。だからいつも「手作り」を忘れずに自分の感覚を磨いて、事実を見つめる力も養ってエビデンスを捉える力をめざしたいと思います。

私自身は、お互いを尊重しあって議論できる環境づくり、自分のありようや周りのありように気づけるような場作り、それらができるようなアンテナをはれる自分に向き合っていきたいと思います。受講生の今の動きから、「気づきの束」から受講生を感じられるように教育委員会がまずは感性を高めていきたいと思います。

「自分づくり」と 「自分づくりの場」の提供

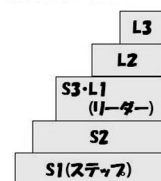


東医療センター 看護部

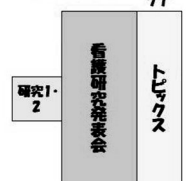
6

自分づくりの場の提供


主体的に自己開発



EBNを使う



アンテナ



新人がエンタシェン
基礎の学習(学生時代)

心が まえ	実践	コミュニ ケーション	リーダー シップ	研究	社会 情勢
看護のこころ					


看護の知と技と心を みがかく術と業



東医療センター 看護部

8

めざすは「よい良い看護」ing 大切なのは「今」と 向き合う自分



東医療センター 看護部

9


役割の変わり目では、 いつも「新人」になる



東医療センター 看護部

10


「人のせい」から抜け出したら 自己開発の始まり



東医療センター 看護部

11

手作りの中にエビデンス



東医療センター 看護部

12

現任教育の場での切磋琢磨 気づきへのアプローチ 教育担当の課題



東医療センター 看護部

13